

## 24. 「日本ロータリーの昔話」 その4

今日は、日本のロータリーに未だガバナー制度がなかった時代の話をご紹介します。それは、ロータリーの標語 "Service above self" についての神戸クラブの初代会長松方幸次郎氏と初代スペシャルコミッショナー米山梅吉氏との問答であります。

松方幸次郎氏は、イギリス育ちでありましたから、英語には堪能でありました。当時、米山氏がスペシャルコミッショナーとして神戸クラブを公式訪問した時に、松方氏が、『米山さん、私は日本人だから、英語のことはよく解らない。殊に "Service above self" という言葉はよく判らない。貴方は、日本の全クラブを統括するスペシャルコミッショナーであり、国際ロータリーを代表する人であるから、一つ、この言葉を納得のいくように説明して貰いたい』と言ったのであります。

ところが、米山氏は、どうしても、この言葉を原理的にうまく解説出来ませんでした。結局、米山氏は、松方氏に『貴方の言うことは、よく判らない』と言われてしまったという記録が神戸クラブの歴史の中に出て来るのであります。

流石の直木太一郎バスターガバナーも、この理由がよく解りませんでしたので、英米法学者の小堀健助先生に『小堀さん、このところは一体どういうことでしょうか』と質問されたのであります。小堀先生は、これを研究課題として長い間、心の中に温めておられたのでありますが、ロータリー思想の理論構造を解明したときに、この疑問点が氷解したと云っておられました。

そこで、話は遡りますが、1911年、全米ロータリークラブ連合会の第2回大

会において Benjamin Franklin Collins が "Service, Not self" という標語を発表しましたが、その10年後の1921年頃、Arthur Frederic Sheldon が "Service above self" という標語を提唱しました。実は、その頃、シカゴのロータリアンが、"Service, Not self" という標語をロータリーの視点から分析していて、これは一寸おかしい、と考えたのであります。何故かと言いますと、ロータリーというものは、その根底に良質な職業人の "self" 即ち自我があります、ロータリー運動は、良質な職業人を運動の基本単位と考えるわけでありますから、そのロータリアンは、既に "self" 自我を持っています。したがって、"Not self" ではありません。Franklin Collins が言うように『自我を滅却して、神の司る宇宙の秩序体系のもとに帰依しよう』などということは到底出来ることではないのであります。

もともと自我はあった。その自我を例会を通じて少しずつ改めていくことが、やがて、利己と利他とを調和せしめる。つまり、神様の世界に自分を没入させることになるのであります。それは聖者の世界の出来事であって人間にとっては死ぬまで不可能であります。したがって、この世にある限りは、人間はあくまでも人間なのであって、長所も短所も持ちながら自己改善をする。それが、やがて奉仕の世界に入っていく。この様な考え方からすれば、"Service, Not self" は妥当でない。"Not self" では "Service" は実現できないと考えたわけであります。

## 25. 「日本ロータリーの昔話」 その5

前回は、シカゴのロータリアンが "Service, Not self" を分析していて、Not self" 自己犠牲では "Service" は実現できないと考えた、ということを示しました。

つまり、ロータリアンの自我は、既に良質な自我である。その良質な自我を、更に良質化していくために、毎週一回の例会で自己研鑽に励む、という考え方をロータリーの思想の中核体だと考えますと、それは self を Not、即ち否定するのではなく、self の above、即ち上に Service を考える。これが "Service above self" なのであります。

ところが、このように考えたものの実は、"Service above self" という言葉は、英語の慣用例の中にはないのであります。中世神学以来のマルチン・ルターなどの考え方では、Service という言葉は、即ち Not self" を意味したのであります。

人間というものは自由意思は持っていますが、神様の世界から見れば次元の低いものであります。したがって、絶対者である神に対しては自己を主張出来ない、自己を捨てて、ひたすら神の秩序体系の中に没入していくことによって、自分の二度とない人生を価値あらしめることが出来る。それ以外には、自分の価値など見つけることは出来ないという、これが中世人の考え方でありました。

この考え方が、近世社会に伝えられていますから、英米人が Service と言え、これ即ち "Not self" を意味したわけであり、したがって、"Service above self" という用語例はありません。したがって、"Service above self" というのは、実に奇妙な概念でありますから、この言葉が出たと

きに、シカゴのロータリアンは爆笑したというのであります。『ロータリーは、変だね。原理的に見てみると、自分達は、Service というのは、即ち "Not self" 自己犠牲だと思っていた。しかし、これではロータリーの一義が立たないので、ロータリーの原理である自己改善から組み立てて行くと、"Service above self" ということになる。これはおかしいね』と。つまり、"Service above self" で成程と納得するのは、英語が判っていない証拠なのであります。英語が判っている人はおかしい言葉だと思うわけであり、

そこで話は前回に戻ります。神戸ロータリークラブの初代会長松方幸次郎氏は、イギリス育ちであり、英語がよく判っていましたから、『米山さん、私は日本人だから、英語のことはよく判らない。殊に "Service above self" という言葉はよく判らない。』と言ったのであります。詰まり、松方氏の考え方からすると、"Service" と謂うのは、即ち "Not self" 自己否定、自己犠牲なのであります。これでスカッと判るのであります。これが英語系国民の慣習なのであります。

"Service above self" などと、self の上に "Service" を乗せる考え方は、英語を素直に判る人には理解出来ないものであります。したがって、松方幸次郎氏は、素直に英語の判る人、即ち英語の大家であったと謂うことが出来るのであります。

## 26. 「日本ロータリーの昔話」 その6

前は、元来、英語で "Service" と謂えば即ち "Not self" 自己否定、自己犠牲である、と謂うことを申し上げました。したがって、"Service above self" を「超我の奉仕」と翻訳するのは正しくないのでありまして、「超我の奉仕」というのは、"Service, Not self" のことなのであります。したがって、"Service above self" とは、米山さんの訳では、「奉仕第一、自己第二」と謂うことになるのであります。

このように、"Service above self" というのは、絶えず "Service" を志す心をもって自己改善を計るべし、ということであり、それは、「神の世界」即ち「宗教の世界」に至ることを意味しないのであります。

しかし、日常の自分の心を磨き、行動を改善すれば、それが地域社会万般を潤す契機になることは間違いないのでありますから、これを「実業倫理」と呼ぶわけでありまして。したがって、"Service" とは自己否定ではなく、自分を改善することであり、"Service, Not self" とは、概念の次元が異なるのであります。

要するに、"Service, Not self" は「宗教の世界」、"Service above self" は「実業倫理の世界」と謂うことになるのであります。したがって、英語の慣用例にない "Service above self" は Arthur Frederic Sheldon の造語であると思うのであります。

実は、当時、米山さんは、この両者の区別が判らなかったのでありますが、それは英語の理解力だけの問題でありまして、米山さんも松方さんも、ロータリアンとしては超一流の実業人であったことは当然のことです。

日本ロータリーの創立者である米山さんは三井財閥の重役であり、また、松方幸次郎さんは、日本の資本主義の基礎を作ったといわれる明治の政治家松方正義の三男であり、川崎造船の社長であると共に松方コレクションで有名な美術収集家でもありました。このように戦前の日本のロータリーは、真の意味でエリートと呼ばれる人達によって組織されていたのであります。

直木太一郎バスターガバナーの手紙によりますと、米山さんが東京ロータリークラブにおいて選んだ会員は、国際感覚を有する一流財界人ばかりでありまして、創立当初のシカゴクラブとは対照的に中小企業経営者は一人も居なかったのであります。東京クラブは、日本の面目にかけてもシカゴやロンドン等の先輩クラブに負けてはならないと、例会運営も本場通りに整え、英文の週報を発行して各地に送ったりして、いち早く、その存在をロータリーの世界に認めさせています。

また、大阪クラブは、ロータリーの奉仕の理念やクラブの規則通りの運営などを当時の日本の社会の実情に調和させようと努力し、いち早く、定款・推奨クラブ細則その他を翻訳したりしているのであります。このようなことは、当時の一流財界人にして初めて為しえたことでありまして、このことを考えますと、昭和の初期から軍閥の弾圧を避けるためもあってロータリーの庶民化が提唱されましたが、これは見当違いであると謂うのが直木太一郎さんの見解であります。

## 27. 「日本ロータリーの昔話」 その7

前回は、直木太一郎さんの手紙から、東京クラブ創立時の会員は、国際感覚を有する一流財界人ばかりでありましたので、日本の面目にかけてもアメリカの先輩クラブに負けてはならじと例会運営も本場通りに整え、英文の週報を発行してその存在を世界のロータリーに認めさせたという話を致しました。

実は、このようなことは、当時の一流財界人にして初めて為し得たことでありまして、このことが戦前の日本ロータリーの高潔な精神伝統を築き上げる基礎になったことは疑うべくもない事実であります。

さて、「和魂漢才」という言葉があります。和魂は日本民族固有の精神であり、漢才は中国伝来の知識・学問のことです。これは日本固有の精神をもって中国の学問を消化・活用することを意味しますが、「和魂漢才」をもじった言葉に、「和魂洋才」という言葉があります。これは、日本人としての精神を堅持しながら、西洋の知識・学問を受け入れることでありまして、日本の近代化は将に和魂洋才のスローガンのもとに始まったのであります。

実は、日本のロータリーも1920年、東京クラブの創立によってアメリカのロータリーを受け入れましたが、日本の先輩達は、将に和魂洋才の精神をもって日本の風土に馴染むように日本独自のロータリーを作るべくロータリーの日本化に努力したのであります。ただ、そのことの根底には、元来、思想も風俗習慣も異なるアメリカ発のロータリーに対する違和感があったのかも知れません。

しかし、日本の先輩達は、20世紀が戦

争と革命の世紀だと謂われたその激動の時代を見事に生き抜いて、素晴らしい精神伝統を残してくれているのであります。殊に、日本ロータリーの歴史の中核は戦前の歴史であります。このエネルギーの延長線上に戦中、戦後の歴史があるのであります。

就中、肝に銘ずべきは、戦前の日本ロータリーの高潔な職業倫理であります。例えば、日本の四代目ガバナー朝吹常吉氏、この人は帝国生命の社長時代、公私峻別を厳格にしたことであまりにも有名であり、その後輩藤川博氏の回顧文によれば、『一枚のハガキを投函するにも、社用のものは給仕に托されたが、私用のものは、必ず自分でわざわざメールシュートまで入れに行かれた』と謂います。

また、秘書の斉藤政之助氏は、『朝吹社長は、潔癖すぎる位潔癖な人で、社長室には1本別に私費で架設された電話があり、私用の際は必ずそれを使って、料金は自弁された。また、ご自分の費用で自家用車を持たれ、会社の車にはお乗りにならなかった。世の中には、財産を沢山持ちながら、会社の費用に便乗せんとする者の多いのを嘆いて、自らは潔癖を押し通された。しかし、他の重役達には、能率と体面を保つために会社の車をあてがって、自分が出るからといって、これを他人に強制しようとはなさらなかったことは、如何にも尊いものであった』と記されています。今の政治家や事業家に聞かせたいものであります。